法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<書評>遊座昭吾著『啄木秀歌』：すぐれた啄木短歌の入門書

玉木，金男

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
39
(開始ページ / Start Page)
90
(終了ページ / End Page)
91
(発行年 / Year)
1988-06-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019559

書評

遊座昭吾著『啄木秀歌』

――すぐれた啄木短歌の入門書――

玉木　金男

一九八六年、啄木生誕百年記念事業の推進者として活躍された遊座氏の『啄木秀歌』が今年の五月、新宿区の八重岳書房より出版された。奥付の著者略歴によると遊座氏は、一九五一年に法政大学日本文学科を卒業された私たちの先輩であるが、そこでひどく驚ろかされたことは、氏が一九二七（昭2）年になんとわが国の代表的国民詩人である石川啄木と同じ生家に生まれたひとだということだ。毎日新聞の新刊著者紹介欄の『ほんの周辺』（今年の三月二十一日の朝刊）に、そのことがややくわしく次のようにかかれている。

『（遊座氏は（詩(歌)人の郷里・岩手県玉山村渋民生まれ。もっと正確にいうなら、詩人が十八歳まで過ごし、あの人類への警告を書き続けたお寺、宝徳寺に、この人も生れ育った。書院造りの一室の〃布置結構〃は八十年以上経った今もほとんど変らないという。「あの静寂さの中で啄木が文学に目ざめていたのかと考えると、胸の中にこみあげてくるものがあるんです。」住職だった啄木の父一禎をはさみ、この人の祖父、父も同寺住職だった。宗費滞納などで悪評高い一禎は、追放されたことを根に持ち両家に確執もあったらしいが、今や昔話。（中略）「啄木と同じ空間で生きたことで私は結ばれている。悪く書くなんてできないですねェ』

『啄木秀歌』はかかる著者の肉声によってかかれた啄木歌一〇〇首の鑑賞書なのである。そしてやさしい丁寧な記述からみて、中学生高校生の読者をも心に置いているように思われる。選択された一〇〇首は『一握の砂』五五一首から73首と、『悲しき玩具』一九四首からの27首とから成り、別に「小伝　詩人の魂」の一章が付く。はじめ私は、一読してわかるいわば口語短歌の発想にもひとしい啄木歌を、何ゆえに〃秀歌鑑賞〃なのか、と疑った。しかし、すぐにその考えの浅さに恥じねばならなかった。

「東海の小島の磯の白砂に」にはじまるこの書物をめくって僅か十数頁の間に、少なくとも過去二回は啄木歌を通読しているはずの私の目に、何んと九首中三首があたかもはじめて出会う歌の新鮮さをもって次々にとびこんでくるではないか。その三首とは、「大海にむかひて一人／七八日／泣きなむとすと家を出でにき」「しつとりと／なみだを吸へる砂の玉／なみだは重きものにしあるかな」「やはらかに積れる雪に／熱てる頬を埋むるごとき／恋してみたし」（『一握の砂』）である。

いったい私は何を読んできたのかと臍を噛む思いであった。かかる思いに対して遊座氏は、「啄木の歌は一読してすぐ何を詠んだかが理解されます。しかし、そこで歌の鑑賞を止めないでほしいものです。」といい、「言葉の奥に立ち入って味わってみたい。」とかいて、急いで駆け抜けようとする私たちに立ち止まることを要請してやまないのである。鑑賞とはまさに〃立ち止まる〃ことなのであろう。

このような心をもつ遊座氏は、「百姓の多

くは酒をやめしといふ。／もつと困らば、／何をやめるらむ。」（初出　明治四十四年二月号『創作』・『悲しき玩具』）に対して、その数か月前に作った、「田も畑も売りて酒のみ／ほろびゆくふるさと人に／心寄する日」（『一握の砂』）を比較し、その二つの歌集の間にみられる「うたう心とか姿勢に、微妙な違い」を読み、さらに次のようにかく。「病いと貧しさのために、どうにもならぬ生活に追いつめられている啄木です。だから、同じ状態の百姓の生活がよくみえてきて、（中略）身につまされて思い、そこから生まれるいきどおりに似た気持をこの歌にたたきつけているのです。」

私たちは回想歌の多い『一握の砂』から、結核と貧困と嫁姑の解きがたい不和で一家は破滅の状態（節子も母・カツも同じ結核を病み、母は明治四十五年四月に死んだ啄木に一か月先立って他界）にある啄木最晩年の生活を直截に表現した『悲しき玩具』への推移。そしてさきにあげた百姓歌や、「やや遠きものに思ひし／テロリストの悲しき心も――／近づく日のあり。」などの歌と同時期に、大逆事件に触発され幸徳秋水やクロパトキンにのめり込んだ啄木が、革命希求と日本に於ける絶望を詠った絶唱――『はてしなき議論』『ココアのひと匙』『暮碑銘』を含む九編の詩集『呼子と口笛』をひそかにかいていたことなど、あらためてこの書から身の引き締まる思いを味わうのである。

私はこの他に、「たはむれに母を背負ひて」の歌を抒情ではなく、深い魂の衝撃の所産とみる著者の鑑賞や、「石をもて追はるごとく」、「小奴といひし女の」、「解けがたき不和のあひだに」などに教ったことと不足感があって言及したいが、今や紙数を超えた。

さいごにぜひ書きつけておきたいことがある。それは「いのちなき砂のかなしさよ／さらさらと／握れば指のあいだより落つ」が、ノーベル賞受賞物理学者湯川秀樹さんの最も愛された愛唱歌であり、「物理学の法則をつかんだと思いながら、しかし、その理論のくずれていくことを、どれほど体験したかしれません。五十、六十の年になって、しみじみと人生のむなしさ、いや虚無さえ感じるのですが、啄木はすでに二十代の半ばで、この思いに到達していたのです。」と著者が心こめて引用されている個所だ。あの湯川さんが、〝理論のくずれ〟のむなしさを啄木歌に思い重ねあわせていたとは！

そこでつくづく思うことは、さらりとした爽やかなエスプリで、いま二〇〇万部を突破した『サラダ記念日』の俵万智についてだ。俵さんは期せずして啄木短歌を受け継ぎ、現代の感情生活に親しみ深く短歌を寄りそわせる画期の大衆化の道を拓いた。しかし、その内実とする精神と生活の軽やかな風俗的タッチから脱皮し、より深い喜怒哀楽を詠いあげる真の国民詩人となることができるか。『啄木秀歌』をくぐった眼で私は、今後を注目したい強い欲求をもつ。

なお遊座氏には、すでに『啄木と渋民』『石川啄木の世界』の主著があり、いま、二年前にできた新「啄木記念館」の活動でお忙しいそうだ。ひきつづきご壮健と健筆を心から祈りたい。（『啄木秀歌』は八重岳書房刊・四六判・一九二頁・一、二〇〇円）

（一九六四年三月大学院修士課程修了）